

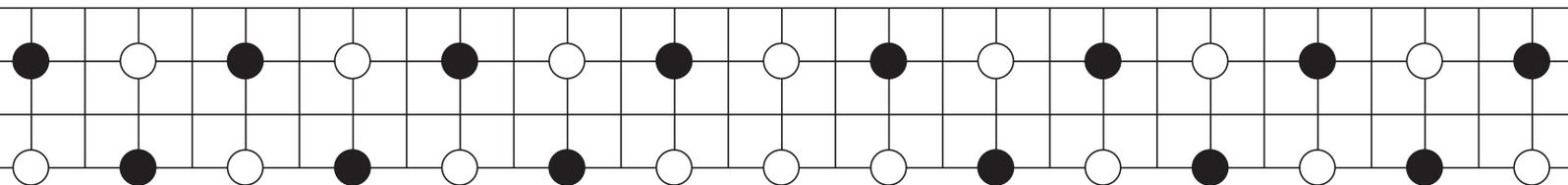
全日本女子学生本因坊 2年連続ベスト4

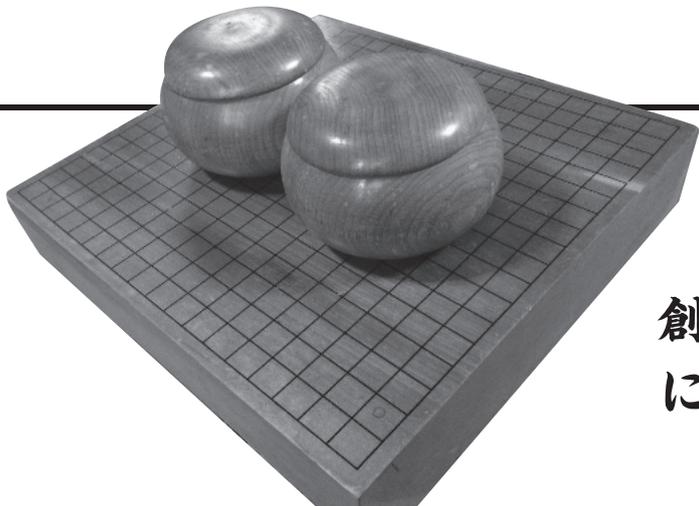
これからも囲碁の楽しさを伝えたい

中大棋道会囲碁部長 阿久津千尋さん



全日本女子学生本因坊決定戦で対局中の阿久津さん（本人提供）





祖父譲りの碁盤と碁石を自室に持ってきた

囲碁は集中力が身につき、
創造力を育み、発想が豊か
になる頭脳スポーツです。

(日本棋院HPから)

学生囲碁の日本一を決める女子の部、第52回全日本女子学生本因坊決定戦が8月6～7日に行われ、中央大学経済学部3年、中大棋道会囲碁部長の阿久津千尋さんが、昨年の準優勝に続き2年連続ベスト4に入った。

学生記者 山田亮太郎 (法学部2年)

碁盤と碁石さえあれば、老若男女関係なく、対局を通じて打ち解ける。いままで多くの人と出会えたのは囲碁のおかげです—。

そう語る阿久津さん。全日本女子学生本因坊決定戦に出場するのは今夏で3度目だ。初出場の1年次は3回戦敗退。2年次の昨年は、中大勢では2004年優勝の高倉梢さん以来12年ぶりの学生女王誕生かと期待させた準優勝。出場3度目

の今回は準決勝で涙をのんだ。この対局で決勝へ進出した早大生が優勝した。

「準決勝はチャンスの場面もあったのですが、そこを逃してしまって、悔しいです」。勝負師としての一面をのぞかせながらも、「ベスト4を目標に頑張ってきたのでうれしいです」

地力を発揮したのは予選リーグ第3局だった。「厳しい対局でしたが、僅差で勝つことができ、あの瞬間はホッとしました」

昨年に続く全日本ベスト4。自身が初出場した第50回大会以降の3大会で、連続4強の実力者は連覇の立命大生を含めて、わずかに3人。

阿久津さんによると、大会で上位進出してくるライバルたちは小学校高学年からの顔なじみだ。会

場で居合わせると「久しぶり。最近どうしてるの」と思い出話に花を咲かせる仲である。しかし、碁盤を挟んだ瞬間に表情は一変する。楽しく談笑していた温顔はない。

自分が打つべき手を考え、状況判断に頭をフル回転させる。一瞬のアヤ～勝負を決する微妙な作戦や駆け引きなど～で、勝敗が入れ替わる「戦場」なのだ。

対局の合間には働いた脳を休ませるため、チョコレートを口にする。バックの中には、お気に入り銘柄をいつも潜ませている。

道場は中大棋道会囲碁部(学友会文化連盟)。練習は主に「対局」、「詰め碁」、プロ棋士に学ぶ「棋譜並べ」の3項目。

部は1936(昭和11)年の関東リーグ創設時、参加7校の一つと知られる古豪。OB・OGには、そ

第52回

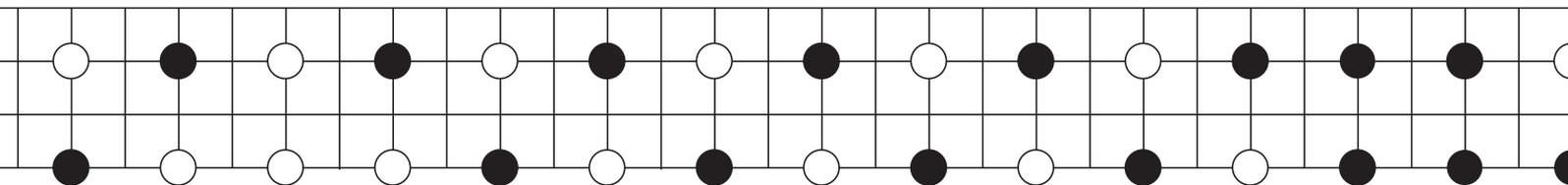
全日本女子学生本因坊決定戦

開催 8月6～7日

場所 日本棋院(東京・市ヶ谷)

主催 毎日新聞社、
全日本学生囲碁連盟

後援 日本棋院



うそうたる実力者が集う。

全日本学生本因坊(2003年)の白石勇一六段らプロ棋士多数。アマチュアの世界選手権で3度優勝した今村文明氏ら実力者の面々。NHK囲碁番組の司会を務めた木下かおり氏ら。ファンなら顔が浮かんでくるはずだ。

「私なんてまだまだです」と一歩下がるものの、部員30人を率いる部長である。同部は300人を超える卒業生とのつながりが深い。月に1度、東京・新宿で“現役を鍛える会”に臨む。日頃から学生が出場する大会を熱心に観戦するOB。観戦が叶わなくても大会棋譜をチェックするOB。現役部員としては気が抜けない。

こうした頻繁な交流が中大囲碁部の伝統と格式を支えてきたのだろう。囲碁インストラクターのアルバイトを紹介されたのも先輩からだ。

阿久津部長は時に、錬磨の先輩棋士を負かせてしまうことも。勝負の世界では「恩返し」というそう

だ。

意外にもアウトドア派!?

全体練習が終わっても棋道は続く。実家から離れた自室で、祖父譲りの碁盤に向かい、手筋を読む毎日だ。

碁盤との出会いは、小学校2年の頃。囲碁好きの祖父が彼女を碁会所へ連れていった。

「囲碁はおじいちゃんたちがするものだと思っていました。私より年下の幼稚園児も来ていてびっくり。イメージが変わりました」

自宅から車で約20分の碁会所通いが始まった。ルールを覚え、黒か白の石を打つ。小学校5、6年の頃には週5回通うまでに。いつしか奥深さがある世界のとりこになってしまった。

中学進学と同時に剣道部に入部。体を動かすことも好きで、小学校では「運動クラブ」の一員。今でも年に数回、父とスキー場へ行く。碁盤を離れるとアウトドア派になる。

中学時代、午前中は剣道、午後は

囲碁という日もあった。1日に2度、礼儀作法を学んだ。文武両道の第一歩だったのだろう。

座右の銘は「勝って兜かぶとの緒を締めよ」。相手のミスによる勝利もある。勝って満足しては、向上心が止まってしまう。勝ってから次のステップが大事なのだと話す。謙虚なこの姿勢こそが、囲碁の強さ、心の強さと思われる。

囲碁一家ではなかった。両親は碁に縁がなく、兄は野球に夢中だった。実家の栃木は野球どころである。今夏の全国高校野球(甲子園)は県代表の作新学院が優勝した。

高校生になると、祖父と通った碁会所が徒歩圏内となった。土曜、日曜も通った。大学進学を考え始めたとき、心を奪われたのが中大囲碁部。

伝統と実績、OB・OGらによる強化・協力体制などに惹かれ、中大受験を決める。「それに都心にはない、自然豊かな多摩キャンパスの

囲碁から生まれた主な言葉

一目置く

一つ石を置いて勝負を始めるところから自分より相手が優れていることを認め、一歩譲る。強めて「一目も二目も置く」ともいう。「だれもが一目置く人物」

駄目

囲碁で、両者の境にあってどちらの所有にもならない目

傍目八目

物事の是非や得失は、当人たちより第三者の方が正しく判断できるというたとえ。傍目は傍らから見る意で、八目は囲碁で八つ先の手のこと。すなわち、他人の碁を脇から見ている者には、対局者の手がよく分かり、八目も見通せるという意。(この稿 岩波ことわざ辞典)

碁に凝ると親の死に目に会わぬ

碁は、親の死に目にも会えないほど、夢中になりやすい。

雰囲気にも惹かれました」

百戦練磨の女性棋士が次に目指すのは12月3～4日に行われる第3回世界学生ペア碁選手権だ。ペア碁とは男女一組になって交互に打つ。

前は強豪の韓国、中国や欧米など11カ国・地域の16ペアで争った。昨大会は3月の関東学生ペア碁を制し、勇んで臨んだものの早々と敗退。この冬に期するものがある。

関東学生でペアを組んだ大関稔さん(専修大2年)はことしの学生本因坊のタイトルを獲得した。

個人戦とは違った難しさがあるという。そこがペア碁の醍醐味だ。対局中は原則、味方ペアとの相談は禁止され、自分が考えてもなかったところにペアが打つことは日常茶飯事だ。自分の打つ手を臨機応変に変えていかなければならない。ペア碁で新たな力をつけたい、と思っている。

碁碁を取り巻く環境が変わりつ

つある。3月に碁碁用の人工知能(AI)「アルファ碁」がトップ棋士に勝った。4月には井山裕太名人が史上初の七冠達成。

週刊少年ジャンプに連載された『ヒカルの碁』がブームになったことで、少年少女からシニア世代の初心者まで愛好者が増え、以前より注目を浴びるようになっている。彼女も連載漫画のファンの一人だ。

「碁碁は楽しいですよって伝えたい。書店にある碁碁の本を手にとってくれるだけでも、私はうれしい」



□ ほんいんぼう 本因坊

碁碁の一流派。碁碁所四家の筆頭。安土桃山時代の本因坊算砂を祖とし、二世秀哉まで継承。昭和4年(1939)以後、碁碁の専門棋士による選手権の優勝者に与えられる称号。

□ 本因坊算砂 (1558—1623)

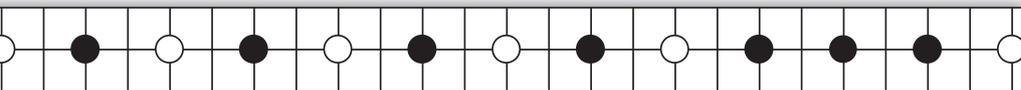
安土桃山・江戸初期の僧・碁碁棋士。京都の人。本因坊家の始祖。本姓、加納。幼名、与三郎。日海と称し、寂光寺の塔頭、本因坊に住んだ。若年から碁・将棋の達人で、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えた。最初の名人碁碁所。

□ 本因坊秀哉 (1874—1940)

碁碁棋士。東京の生まれ。本名、田村保寿。一九世本因坊秀栄の門下に入り、二世本因坊を継いで秀哉と号した。本因坊の名跡を開放して実力時代への門を開き、最後の世襲制碁碁名人となった。

□ 塔頭

禅宗で、大寺の高僧の死後、弟子がその徳を慕って墓の塔の頭(ほとり)に構えた寮舎。大寺院に敷地内にある小寺院や別坊。脇寺。



捨て石

碁碁で、自分の形勢を有利に導くため、相手に取らせるように打つ石

布石

碁碁で、序盤戦での要所要所への石の配置。将来のために配置しておく備え。「新党結成への布石を打つ」

目算

碁碁で、対局中に相手と自分の地を計算すること。

碁碁に負けたら将棋で勝て

あることで失敗しても、くよくよせず、他のことで取り返せ。

(いずれも大辞泉より)